

読む・百人一首 061

伊勢大輔

いにしへの

奈良の都の

八重桜

けふ九重に

にほひぬるかな

いにしへの

ならのみやこの

やえざくら

けふここのへに

にほひぬるかな

読む・百人一首 062

清少納言

夜をこめて

鳥のそら音は

はかるとも

よに逢坂の

関はゆるさじ

よをこめて

とりのそらねは

はかるとも

よにあふさかの

せきはゆるさじ

読む・百人一首 063

左京大夫道雅

今はただ

思ひ絶えなむ

とばかりを

人づてならで

言ふよしもがな

読む・百人一首 064

権中納言匡房

朝ぼらけ

宇治の川霧

たえだえに

あらはれわたる

瀬々の網代木

いまはただ

おもひたえなむ

とばかりを

ひとづてならで

いふよしもがな

あさぼらけ

うちのかわぎり

たえだえに

あらはれわたる

せぜのあじろぎ

読む・百人一首 065

相模

恨みわび

ほさぬ袖だに

あるものを

恋にくちなむ

名こそ惜しけれ

うらみわび

ほさぬそでだに

あるものを

こひにくちなむ

なこそをしけれ

読む・百人一首 066

大僧正行尊

もろともに

あはれと思へ

山桜

花よりほかに

知る人もなし

もろともに

あはれと思へ

やまざくら

はなよりほかに

しるひともなし

読む・百人一首 067

周防内侍

春の夜の

夢ばかりなる

手枕に

かひなく立たむ

名こそ惜しけれ

はるのよの

ゆめばかりなる

たまくらに

かひなくたたむ

なこそをしけれ

読む・百人一首 068

三条院

心にも

あらでうき世に

ながらへば

恋しかるべき

夜半の月かな

こころにも

あらでうきよに

ながらへば

こひしかるべき

よはのつきかな

読む・百人一首 069

能因法師

あらし吹く

み室の山の

もみぢ葉は

竜田の川の

錦なりけり

あらしふく

みむろのやまの

もみぢばは

たつたのかはの

にしきなりけり

読む・百人一首 070

良暹法師

さびしさに

宿を立ちいでて

ながおれば

いづこもおなじ

秋の夕ぐれ

さびしさに

やどをたちいでて

ながおれば

いづこもおなじ

あきのゆふぐれ

読む・百人一首 071

大納言経信

タされば

門田の稲葉

おとづれて

蘆のまろ屋に

秋風ぞ吹く

ゆふされば

かどたのいなば

おとづれて

あしのまろやに

あきかぜぞふく

読む・百人一首 072

祐子内親王家紀伊

音に聞く

たかしの浜の

あだ波は

かけじや袖の

ぬれもこそすれ

をとにきく

たかしのはまの

あだなみは

かけじやそでの

ぬれもこそすれ

読む・百人一首 073

権中納言匡房

高砂の尾の

上の桜

咲きにけり

外山の霞

立たずもあらなむ

読む・百人一首 074

源俊頼朝臣

憂かりける

人を初瀬の

山おろし

よはげしかれとは

祈らぬものを

たかさごの

をのへのさくら

さきにけり

とやまのかすみ

たたずもあらなむ

うかりける

ひとをはつせの

やまおろしよ

はげしかれとは

いのらぬものを

読む・百人一首 075

藤原基俊

契りおきし

させもが露を

命にて

あはれ今年の

秋もいぬめり

ちぎりおきし

させもがつゆを

いのちにて

あはれことしの

あきもいぬめり

読む・百人一首 076

法性寺入道前関白太政大臣

わたの原

こぎ出でてみれば

ひさかたの

雲ゐにまがふ

沖つ白波

わたのはら

こぎいでてみれば

ひさかたの

くもゐにまがふ

おきつしらなみ

読む・百人一首 077

崇徳院

瀬をはやみ

岩にせかるる

滝川の

われても末に

あはむとぞ思ふ

読む・百人一首 078

源兼昌

淡路島

かよふ千鳥の

なく声に

いく夜ねざめぬ

須磨の関守

せをはやみ

いはにせかるる

たきがはの

われてもすゑに

あはむとぞおもふ

あはぢしま

かよふちどりの

なくこゑに

いくよねざめぬ

すまのせきもり

読む・百人一首 079

左京大夫顕輔

秋風に

たなびく雲の

たえ間より

もれ出づる月の

影のさやけさ

あきかぜに

たなびくくもの

たえまより

もれいつるつきの

かげのさやけさ

読む・百人一首 080

待賢門院堀河

長からむ

心も知らず

黒髪の

乱れて今朝は

ものをこそ思へ

ながからむ

こころもしらず

くろかみの

みだれてけさは

ものをこそおもへ